

増補 日本近代教育の思想構造

安川寿之輔

R7(5)-711/



290432

増 補

日本近代教育の思想構造

福沢諭吉の教育思想研究

安川寿之輔



新 評 論

著者紹介

安川寿之輔

やすかわじゆ の すけ

1935年 兵庫県に生まれる

1959年 神戸大学教育学部卒業

1964年 名古屋大学大学院教育学研究科修了

市邨学園短大講師，宮城教育大学助教授などをへて

現在 埼玉大学教育学部助教授，教育学博士

著書 『部落問題の教育史的研究』（共著，部落問題研究所，1978年）

『世界教育史大系』第3巻，第39巻（共著，講談社，1976～7年）

『岩波講座・日本歴史』第15巻（共著，岩波書店，1976年）

『日本近代教育百年史』第1巻（共著，国立教育研究所，1973年）

『講座・現代民主主義教育』第2巻（共著，青木書店，1969年）ほか

現住所 (〒351)和光市諏訪原2の5の204

(〒464)名古屋市千種区池園町2の75の8

増補日本近代教育の思想構造

1970年10月31日 初版第1刷発行

定価 3500円

1979年5月25日 増補第1刷発行

著者 安川寿之輔

発行者 二瓶一郎

発行所 株式会社 新評論

東京都新宿区西早稲田3-16 電話 東京(202)7391番
(郵便番号 160) 振替 東京 6-113487番

印刷 白陽舎 (44)

落丁・乱丁本はお取替えします

製本 清水製本所

© 安川寿之輔 1970年

(検印廃止)

3037-370028-3177

増補版へのはしがき

日本の近代社会では、権力者も民衆も、ともに教育を人間形成としてではなくなんらかの手段として、不当なまでに重視する。権力者は、教育を政治的支配と「安くて優秀な労働力」陶冶の手段とみなし、学歴偏重社会に生きる民衆は、よりよい生活への最良のパスポートとして、受験学力の獲得に血まなこになる。民衆は、教育へのその異常な熱意にもかかわらず、むしろこの異常な熱意のゆえに、教育の中味にたいしては極度に無関心となり、その教育内容は、支配者によって長年にわたって恣意的、独占的に支配されてきた。

「家永・教科書訴訟」にはじまる一連の教育裁判闘争は、その日本の民衆が、権力者にたいして「子どもの学習権」「教育の自由」「国民の教育権」などという普遍的な教育の価値の確認をせまっていた輝かしい教育運動のたたかいである。しかしながら、日本の民衆は、その成果を少しづつ自分のものにするたたかいをつみかさねながら、他方で、このつみかさねの歩みを上まわる速さであい次いで強行される政府・文部省による教育反動政策の成立を許しつつある。民衆は、「受験戦争」「偏差値神話」「乱塾時代」にふりまわされ、「おちこぼれ」「非行」「自殺」「家庭内暴力」「殺傷事件」などの教育の荒廃におののくなかで、さしあたり「君が代」国歌化や元号法制化の強行のまえにも無力になっている。

こうした日本の現代教育にたいして、その創生期において、日本の近代教育（思想）の形成に巨大な位置を占めた福沢諭吉に目を移すと、かれが教育による立身出世、国権主義的教育思想、えせ学問・教育独立論、教科書検定肯定論、強迫義務教育論、学問・教育商品論、能力遺伝決定論、貧富に対応する複線型学校制度論、女子教育特性論などという、その多くがそのまま現在につながる教育論、教育思想の彫琢に活躍したことを知ることができ

る。と同時に、これらの教育理念は、児童の学習権、国民の教育権、学問・教育の自由などという時代や対象をこ

える可能性と普遍性をもった近代教育理念とはかなり異質のものであることに気づくであらう。

日本の近代社会では、学問や教育の自由が保証され、そのことをとおして学問・教育の自律的發展がはかられるのではなく、直接政治や経済の課題に奉仕する学問と教育が求められてきた。こうした傾向は、権力と対抗する民衆運動の中にも、学問・教育の政治的運動のひきまわしという形で存在する。つまり、日本の近代社会は、その資本主義発展の後進性に規定されて、社会（や政治や運動）の現実から相対的に独立することによってむしろ、社会的に現実的機能を果たしうるような、さらには、時代貫通的であるとともに全民衆的視座につながる普遍性をもった、そういう独自でゆたかな教育思想を十分形成してこなかったのである。しかしながら、学問と教育を政治や経済や生活の直接的な道具や手段の地位から解きはなつことなしには、私たちは学問と教育を人間解放の道につなげていくことは困難である。

歴史研究に目を移すと、民衆の視座から歴史をとらえなおし、民衆を歴史と思想形成の主体に位置づけようとする「民衆思想史」の研究がさかんである。右にみたような日本の教育史的伝統から考えても、このあらたな歴史方法論は、たしかに歓迎されるべきものである。だがまた、それをいま手放しで歓迎できない状況もある。福沢研究とかかわりで具体的に見ると、きびしい「底辺民衆」の視座から歴史を主体的にとらえなおす「民衆思想史」の作業は、当然「頂点思想家」にも向けられるはずだと私は考えているが、現状は必ずしもそうでない。たとえば、「底辺民衆」とか「奈落と辺境の民衆」という（おどろおどろしい）視座を提示しているひろたまさき氏や色川大吉氏たちの福沢評価がそのきびしい歴史の視座に対比してあまりにも甘いのに私はとまどってしまうのである。とくに（福沢）女性論の把握にそうした傾向の増幅がみられるのは不思議としかいえない。

本書旧版の刊行以後の私の近代日本教育（思想）史研究は、主として〈部落問題の教育史的研究〉をとおして、

「日本の近代教育と差別」の問題にとりくんできた。時期的には福沢研究以前からはじめていたこの被差別部落民の視座から日本の近代公教育史をとらえなおす作業がまだ完成しないまま、本書増補版を出すことには、今も私はためらいを残している。そうした事情で、新評論の二瓶一郎氏の増補刊行のお勧めにもかかわらず、一年以上その仕事を遅らせて迷惑をおよぼしたことをお詫び申しあげなければならぬ。

ためらいを残しながらも今回刊行にふみきることにしたのは、一つには、右の仕事について、昨夏、『部落問題の教育史的研究』（部落問題研究所編・刊）のとりまとめを手伝うことで、私のこれまでの研究の中間報告を果せたこと、二つには、旧版では部分的にしか論及できなかった近代日本社会の最大の被差別者集団としての女性の視座から福沢の教育論をとらえかえす仕事を追加できたこと、三つには、本書旧版への遠山茂樹、ひろたまさき、堀尾輝久その他の諸氏のきびしくも有難い批判にたいして、遅ればせながら私なりの反論をとりまとめることができたこと、以上でなんとか増補刊行の意義を自分に納得させることができた。

増補版にあらたに加えられたのは、(1)後篇第五章「福沢の女子教育論」（宮城教育大学女性論ゼミ機関誌第三号『一九七六年現在』）、(2)補論・書評「遠山茂樹著『福沢論吉』」（『日本読書新聞』一九七一年三月八日）、(3)同・紹介「ひろたまさき著『福沢論吉研究』」（『朝日新聞』一九七六年五月二十四日〈えつらん室〉）、(4)同・批判にこたえて1「堀尾輝久氏の書評にこたえて」（『教育学研究』第三九卷第二号・一九七二年六月）、(5)同2「ひろたまさき・遠山茂樹両氏の批判にこたえて」（書きおろし）、の五篇（転載を了承された各誌紙にお礼申しあげたい）であり、再収に際しては、(1)のみについて「はじめに」の内容に教行加筆して、部分的に語句の表現を手直した以外は、一切手を加えなかった。なお、旧版の後篇補論の書評「牧野吉五郎著『明治期啓蒙教育の研究』」は、増補分のページ数が大幅に増えた関係で、今回削除した。また、旧版「はしがき」は、本書の末尾にまわした。

なお私は、「戦後民主主義」世代に育ちながら、近年になってやっと研究論文では敬称を省略して書くスタイル

を身につけたのであるが、本の統一を保つために増補分もすべて旧版にあわせて敬称を使ったことを断わっておきたい。

ほかに旧版の索引は、部分的な誤りを含めて全体として不十分なものであるが、結局その不備を正さないままにしたことをお詫びしたい。

一九七九年四月

安川 寿之輔

目次

増補版へのはしがき.....一

序 章 福沢諭吉研究の課題と方法.....九

一 福沢諭吉研究の問題点.....九

二 社会思想と教育思想.....一七

前篇 福沢諭吉の近代社会観Ⅱ近代的人間像

——近代日本におけるナショナリズムと教育——

第一章 「学制」Ⅱ『学問のすすめ』の教育理念における個人と国家.....三

一 「学制」Ⅱ「被仰出書」の教育理念.....三

二 『学問のすすめ』における個人と国家.....三

第二章 福沢諭吉における民権論と国権論.....五

一 はじめに.....五

二 〈一身独立〉の経済的条件.....五

三 〈一身独立〉の政治的条件.....六

四 〈一身独立して一国独立する〉の論理構造.....六

第三章 福沢諭吉における日本の近代化と教育.....二

一 日本近代化の綱領的方针.....二

二	日本の近代化にとつての教育の課題	六七
三	近代化の展望と現実	九七

第四章	自由民権運動と福沢諭吉の対応	一〇八
-----	----------------	-----

一	政治反動と教育反動——「大日本帝国憲法」Ⅱ「教育勅語」体制の確立——	一〇八
二	福沢の天皇制論	一二三

第五章	福沢諭吉におけるナショナリズムの展開	一四六
-----	--------------------	-----

一	はじめに	一四六
二	ナショナリズムの対外的屈折——△東洋政略論Ⅴを中心として——	一五三
三	福沢のナショナリズムの論理とその到達点	一六四
四	おわりに	一六九

補論	福沢諭吉における「挫折」の問題	一八六
	——丸山真男氏の福沢像について——	

一	はじめに	一八六
二	国内政治論	一九〇
三	国際政治論	一九五
四	おわりに	二〇五

後篇 福沢諭吉の教育論

第一章	民衆教育論	二三
-----	-------	----

一	はじめに	二三
二	前期Ⅱ「強迫教育論」——資本の本源の蓄積——	二五
三	中期Ⅱ「最も恐るべきに貧にして智ある者」——日本資本主義の成長——	三六
四	後期Ⅱ新「学問のすすめ」と工場労働児童——日清戦争の勝利と産業革命——	六九
第二章	私立学校論	二四九
	——日本近代化のトレーガーとその教育——	

一	基本的教育理念——国権主義的私学論——	二四九
二	私学の独自性の否定——私学経費三分の一論——	二五三
三	体制の維持——遺伝絶対論と学問・教育Ⅱ商品論——	二五九
四	官立学校と私立学校——私立官学論——	二六八
五	慶応義塾小史——「ミッヅルカラス」の形成——	二七三
六	私学の存立基盤と私学行政	二八六
第三章	学問・教育独立論	二九〇
	——近代日本における政治と教育——	

一	はじめに	二九〇
二	『学問之独立』における政治と教育	三〇三
三	福沢における政治と教育をめぐって	三〇九
四	福沢の学問・教育独立論のわく組みと本質	三二〇

第四章	德育・宗教論	三三三
	——近代日本における道徳と教育——	

一 はじめに	三三
二 儒教主義反対論——福沢と儒教主義——	三六
三 徳育Ⅱ宗教論——福沢の徳育論——	三五三
四 おわりに——非合理への傾斜——	三六一

第五章 女子教育論

——日本近代女子教育の思想構造——

一 はじめに	三七三
二 前提——福沢における近代人間（Ⅱ男性）像——	三七六
三 福沢論吉の女性論	三八〇
四 福沢論吉の女子教育論	四一七

補 論

書評 遠山茂樹著『福沢論吉——思想と政治との関連——』	四三二
紹介 ひろたまさき著『福沢論吉研究』	四三三
批判にこたえて	四三四

1 堀尾輝久氏の書評にこたえて	四三四
2 ひろたまさき・遠山茂樹両氏の批判にこたえて	四四〇

旧版はしがき.....四六三

索引 (四六五～四七〇)

序章 福沢諭吉研究の課題と方法

一 福沢諭吉研究の問題点

福沢諭吉は、日本の近代教育思想、より正確には、一九世紀後半の世界史のなかで、欧米のブルジョア的發展に對比して「後進国」であつた日本の近代教育「思想」を身をもつてきざぎざあげたイデオログであつた。明治維新にはじまる日本の上からの近代化の裏うちとして大きな力をもつた「学制」にはじまる日本の近代教育制度、あるいは近代学校論は、福沢の教育思想によつて典型的に表現されたものであつて、それらは、基本的な点においてかつてかれの教育思想と異質なものでも対立するものでもなかつた。しかし、従來の多くの福沢研究は、かれの教育思想が、現実に形成された日本の教育制度とそれをささえる理念に對立するものとして、つまり、天皇制絶対主義的な教育理念にたいするブルジョア自由主義的な福沢の教育理念という図式が一般的であつた。

たとえば、福沢は、私立学校の構想をとおして、「厳格な政教分離」「教育の政治的絶対中立」という「近代的な教育行政」論を展開したととらえられ、同時にそれが、「わが国近代教育史上の傍流的存在」にとどまつたことが指摘されたり、⁽¹⁾もっとすすんで、かれの教育論は、「市民社会の古典的原則」を承認した西欧の「近代教育原則」と同様のものにとらえられたりする。⁽²⁾また、たとえばかれの教育論が「膨脹主義と国家主義への傾斜を内包」していたとたたく把握されたとしても、のちに言及する福沢挫折論の立場にたつて、「初期」に限定すれば、その教育論は、やはり「古典近代の理念を裏切るものとしては現われてくるのがなかつた」ととらえられる。⁽³⁾福沢研究のこうした傾向の極端な例として、福沢の「民主主義」的な教育論あるいは思想が、理解・継承されなかつたため

に、日本は「敗戦という試練」を経験しなければならなかったという把握のように、研究者の思いいれをこめてそれが理想化されると、自由主義者福沢の虚像はその極に拡大される。

具体的な福沢の教育論に即していえば、後篇第三章で検討するように、これまでの研究においては、福沢の〈学問・教育独立論〉がそろって過大評価され、たとえば、河野健二氏によって、「この福沢の学問論はきわめて高度なものであり、八十五年のちの今日においてもなお現実性と有効性を失うものではない。むしろ、われわれの不幸は、いままって福沢のこの識見を生かしえていない点にあるといわねばならない」と主張されたりする。このように福沢論吉の亡霊をひきあいによつて、われわれ日本人は、これまで幾度となく咎めだてられてきた。

この論法は、福沢は近代日本の歴史を超越した「歴史の女神」であり、その導きの星についていけなかった日本の民衆が愚かな民であったという把握になる。これは、ファシズムへ突っぱしっていった戦前の日本の歴史への反省と批判とからくる福沢への思いいれであるといえよう。しかし、福沢自身は、「歴史の女神」にまつりあげられるにしては、あまりにもリアリストであった。かれは、欧米の近代思想の受容にあたつて、あくまで日本の現実の客観的条件をふまえて、それをすぐれて主体的に受容・摂取した思想家であった。そのいみにおいて、かれは文字どおり「時代の子」であった。わたくしが、本書において、従来の一般的な福沢把握とことなり、福沢の近代教育思想の成果のとぼしさを指摘するとしても、それは、思想家福沢のみじめさというより、「これまで日本の社会思想といふものがあつたであらうか」という鋭い問いかけに指摘されている日本の近代社会そのもののもつ矛盾と苦悩（思想的貧困）の反映というべきである。

福沢の初期の思想の最高の成果の一つといわれる『学問のすすめ』のなかで、かれは、一般に個人主義的功利主義を基軸に理論を展開したとされ、したがって、『学問のすすめ』は、日本の近代教育制度の出発点をなす一八七二（明治五）年「学制」の国家富強のための教育という理念とは異なっていたと解釈されてきた。⁽⁷⁾また、同書のかの有名な〈一身独立して一国独立する〉は、〈一身独立〉の内容が検討されないままに、民権論と国権論を統一した近代的国民意識を表明するテーゼであつたと解釈され、さらに、この定式を重要な論拠として、福沢の教育思

想をささえる〈近代社会観Ⅱ近代的人間像〉の中心理念としての初期のナシヨナリズムが古典近代の理念における近代ナシヨナリズムであったという丸山真男氏に代表される把握は、福沢研究においてはほぼ定説になっている。⁽⁸⁾

このような福沢像の理想化は、じつは、思想史研究の方法的問題とするべくかかっているのである。福沢の思惟方法の特徴は、かれがつねに時代と場所をふまえた状況的思考・発言をくりかえしたことである。したがって、その矛盾にみちた片言隻語をもってすれば、研究者の思いいれをこめた福沢の虚像を自由に描きだせることに注意しなければならぬ。じじつ、福沢諭吉ほど多様であい反する評価をうけた思想家はめずらしい。福沢自身が一見矛盾にみちた存在であったことはたしかであるが、問題は、この多様な評価が、福沢の思想にたいするどこまで内在的な把握を前提にしていたかということである。たとえば、福沢の〈近代社会観Ⅱ近代的人間像〉を検討するためには、近代日本における支配者の側の〈近代社会（国家）観Ⅱ近代的人間像〉の確立をいみする「大日本帝国憲法」Ⅱ「教育勅語」体制を福沢がどう評価したかということをしてきかなくてはできない。⁽⁹⁾ところが、それにもかかわらず、従来のほとんどの福沢研究が、この問題についてまったく触れていないのである。^{補註}

^{補註} 具体的事例をあげると、たとえば、福沢が生涯「一貫して力説したのは経済・学問・教育・宗教等各領域における人民の多様かつ自主的な活動であり、彼が一貫して排除したのはこうした市民社会の領域への政治権力の進出ないし干渉であった」⁽⁹⁾（傍点は原文による。以下同様）ととらえる丸山真男氏や、福沢が人間の教育を「市民の私事」として、「国家つまり政治権力が教育に干渉してはならない」という教育の中立性の古典的な思想⁽¹⁰⁾を表明していたととらえる勝田守一・堀尾輝久氏は、後篇第四章であきらかにするように、政治権力が倫理的実体として国民の内面的価値を独占することを宣言した「教育勅語」の制定とその内容に福沢がならん反対しなかったばかりでなく、それを主体的にうけいれる論理をくみだてていたことについて、ならん論及しないまま、右の結論を提起しているのである。

こうしたさまざまな虚像をうみだした福沢諭吉研究の歴史は、あるいみで、そのまま日本の近代社会とその思想の苦悩の歴史でもあった。福沢像をどう描きだすか、つまり、福沢をどうよみこみ、福沢にどのような思想的思いいれをするかは、個々の福沢研究者が日本の近代社会とその思想をどう把握するかにつながっていた。福沢研究の

歴史を、それがおこなわれた時代と社会のなかであらためてとらえなおしてみると、日本の近代社会とその思想のかかえた問題と苦悩の姿がうかがいあがってくる。

戦前、日本のファシズムの嵐がふきすぎ、わずかばかりの市民的自由さえほとんど失われていったとき、羽仁五郎氏の「自由主義者」福沢という把握がうまれた（一九三七年）⁽¹¹⁾。ファシズム支配の急激な高進に抗して、学者としての抵抗の姿勢を崩そうとしなかった羽仁氏は、福沢を最大限に「自由主義者」として肯定的に描きだすことによって、当時の戦争とファシズムの嵐に抵抗したのであり、このいみで羽仁氏の思想的抵抗の側面はたかく評価しなければならぬであろう。こうした羽仁氏の評価の対極に、このファシズムの激流にコミットする方向から、福沢を「国権主義者」「国家膨脹の急尖鋒」として、かれをよみがえらせる把握もうまれた（一九四二年）⁽¹²⁾。このようなファシズムへの抵抗者、またはファシズムの担い手としての福沢像にたいして、第三の評価は、昭和初期のマルクス主義歴史学による日本資本主義研究の延長線上にある永田広志『日本唯物論史』（一九三六年）の福沢研究である。永田は、福沢思想の階級的基盤に視点をすえて、福沢を「徹頭徹尾ブルジョアジーのイデオログ」と規定して、当時としては、かなりの確かな福沢の批判的評価を展開している。⁽¹³⁾

昭和初期のマルクス主義歴史学の開花とファシズムによるその蹂りんのおかげでつづけられた戦前の福沢研究のあとをうけて、戦後は、およそ四つの方向の福沢研究があらわれた。第一の系譜は、戦後民主主義の開花という歴史条件と、ファシズムをうみだした日本の思想へのするどい批判意識を背景にして、日本政治思想史研究をすすめた丸山真男氏による一連の福沢研究の成果に代表されよう。この第一の系譜は、戦前の羽仁氏の評価をひきつぎふくらませた形で、福沢を進歩的ないみにおけるブルジョア・イデオログとして評価する立場であった。福沢は、「十八世紀ごろのイギリス人そっくりの頭」⁽¹⁴⁾をもって、「あくまで純粋な英米流の新興資本主義的イデオログ」⁽¹⁵⁾として終始したとされ、丸山氏は、福沢の政治論の分析から、「典型的な市民的自由主義」⁽¹⁶⁾を結論するのである。典型的な、そしてまた自生的なブルジョア社会の発展が日本の歴史に欠如していたが故に、軍国主義とファシズムを生みだしたとする丸山氏のするどい問題意識は、戦前からの日本の社会科学的研究を規定する問題意識であった

が、氏の福沢研究が暗き谷間の時代にはじめられたという条件もくわわって、この問題意識のするどさのゆえに、福沢論吉にブルジョア自由主義者を読みこむことにもなった。しかし、戦後民主主義の開花という歴史条件のもとでの丸山氏のよみこみは、ファシズムの嵐のさなかに羽仁氏がよみこんだときほどの抵抗のいみは失われ、形式としてもつことのできた戦後民主主義の実質化を要求するといういみあいをおびたといえよう。⁽¹⁹⁾

福沢研究の第二グループは、福沢を日本の近代思想の発展の上できわめてたかく評価する点では第一と同様であるが、ブルジョア自由主義者とは反対に、国権論者あるいはナシヨナリストとしての福沢の評価を前面におしだす方向である。これは、福沢の創設した慶応義塾に關係した小泉信三や加田哲二らの把握である。⁽²⁰⁾ 福沢との人間的接触を直接、間接にもちえたこれらの人たちの評価が福沢への肯定的評価に傾きがちであるのは当然としても、外からの福沢への思いいれも少なく、あるいみできわめて自然な福沢像をつかまえていたともいえよう。この第二の評価はまた、「明治百年」の意義を強調する現在の自民党政府の賞揚する福沢像でもある。⁽²¹⁾

福沢研究の第三の方向は、丸山真男氏と同様の問題意識にたちながら、それゆえにブルジョア自由主義者ではなく、福沢は「狡智かつタフな絶対主義者」⁽²²⁾であると断定した服部之総と、福沢を明治政府の「絶対主義的針路」を指示した「啓蒙専制主義」⁽²³⁾者であると評価した遠山茂樹氏の方向である。⁽²⁴⁾ 戦前にはじまるマルクス主義歴史学による明治維新研究の成果を背景にして、明治絶対主義政府と一体化した福沢像がここに措定されるのである。福沢評価の第四の方向は、第三グループと類似した立場にたちながら、福沢の全生涯の思想を問題にすることによって、比較的初期の福沢を問題にする第三グループとはべつに、否定的ないみにおいて、福沢を「ブルジョア・イデオログ」と評価する方向である。たとえば、鹿野政直氏の把握がそれであり、この把握は、戦前の永田広志の系譜につながるといえよう。家永三郎氏は、初期の福沢は「絶対主義」に傾斜しているが、のちに「ブルジョア・イデオログ」としての本領を発揮するとして、両グループの橋渡しの評価をくだしている。⁽²⁶⁾ 統一的な福沢像の確立は将来にわたっても困難であろうが、この第四グループの福沢研究をえたところで、さまざまな局面からではあっても、福沢の思想の全容は、ほぼあきらかになってきているといえよう。

ところで、以上のような市民的自由主義者から絶対主義者にいたる福沢評価の相違をこえて、論者によるニュアンスの差はあるが、福沢の思想の生涯には途中でなんらかの「挫折」あるいは「屈折」があったというところとえ方が従来の研究の一般的傾向である。そのばあい、「一身独立して一国独立する」という定式に代表される『学問のすめ』が、「挫折」以前の福沢の「初期」の思想を代表するという把握も共通の認識であり、この定式こそは福沢の思想の中核をしめすものであるとされている。しかし、わたくしは、福沢の思想の生涯に基本的な変化があったとはとらえない。もっと端的にいえば、福沢において変化すべき本来の思想が成立していたかどうかということ自体が問題になる。思想というものは、ほんらい現実から一定の距離をおいた自立性を持ち、すくなくとも直接的な社会の現実と利害から相対的に独立して存在することによって、はじめて思想としての現実的機能をはたすのであるが、そういういみの思想を福沢においてとらえることはきわめて困難である。

変化したのは、あくまで福沢をとりまく明治日本の政治的・経済的社会環境であり、とくに、自由民権運動との対抗関係を基軸とする社会状況の変化によって、福沢のはたす政治的・社会的役割は当然変化するが、福沢の「思想」そのものは、「一国独立」富国強兵」という生涯の「大本願」の道を一筋につきすすんだのである。福沢が、くりかえしたがいに矛盾する命題をとえ、状況的発言をつづけたのは、かれ自身の論理（実践的課題）のあいまいさをしめすものではなく、むしろ、かれは、そうすることによって、みずからの論理を強引なまでにつらぬきとおしたのである。問題は、その一貫性と徹底性が、〈近代社会観Ⅱ近代的人間像〉あるいは〈近代教育思想〉についての体系的な原理・原則を確立しえないという犠牲のもとにあがなわれたのではないかということである。

本書の前篇では、福沢の教育思想を分析する前提として、かれの基本的な〈近代社会観Ⅱ近代的人間像〉の解明にとりくみ、後篇では、その成果を前提として、福沢論吉の具体的な教育思想を考察する。福沢の教育思想の分析をおして、日本の近代教育の特徴的な構造の解明を課題とする本書は、とくに、その中心的課題として、福沢の思想、つまり日本の近代思想における政治と教育の関係、日本近代教育思想における国家と個人の関係の考察ととりくむであろう。また、以上の考察をおして、思想家としての福沢論吉の全体像を、「後進国」日本のブルジョ